

東日本大震災 避難生活レポート

平成23年3月11日、最大震度7を記録した東北地方太平洋沖地震により大津波が発生。一瞬にして多くの街をのみ込みました。壊滅的な被害を受けた女川町、多賀城市において、支援者として活動した2人の声をお届けします。



多賀城市職員

菊地 賢一さん



多賀城市の中心地の津波被害状況

多賀城市の最大震度は5強でしたが、市の1/3が津波で浸水。堤防が決壊して川からも海からも津波がくる、都市型津波の典型でした。避難所は人でこった返し、仕切りもなく決して理想的な状況ではなかったです。役所だけでは避難所運営ができないことも学び、震災後の防災訓練は地区単位で実施。コミュニティもできやすいし、要望の解決も市民目線でできます。また震災を教訓に分散備蓄にし、避難所ごとに倉庫を設置。備蓄の使い方を地区の方と共有し誰でも使えるようにしています。

とだと思えます。

必要な視点の一つで、大切なことだと思えます。

行政でルール化せず みんなでジャッジ



避難者であふれかえる学校体育館

日常を一瞬にして奪い去った災害からの再建



ボランティアとして活動した

伊藤 恵悟さん

(現在は女川町在住)

見知りが多い女川という地域だったからこそ情報伝達の統率が取れていたのだと思います。

二次被害で命を落とす悲しい現実
当時は関東に住んでいたのですが、ボランティアとして女川にきました。看護師の仕事をしていましたこともあり、医療に従事する仕事をその日ごとにもらいつつ、途中、在宅避難者のケアに当たっていました。というのも、家が残っているために物資がもらいにくく、健康状態の把握も難しい状況だったんです。自宅が残っている方が同じ地区で家を失くされた方20名ほどを受け入れたものの、負担がかかってしまい、命を落とされたケースもありました。

日に日に変わる やるべきこと



海岸沿いにあった観光物産館での、懸命な撤去作業

暖かくなるとにかく衛生面に気をつけようと、消毒液を撒き、大量発生したハエやウジ虫を徹底的に退治しました。病気が一番心配でしたね。窃盗も発生していて、自宅避難者に欲しいものを聞くと、「金属バット」と言う方がいたのも衝撃でした。物資の受け取り方など知り合いだからこそ見たくない部分もあつたようですが、顔

熊本地震 避難生活レポート

平成28年4月14日以降、熊本県と大分県で地震が発生。益城町では14日と16日に震度7を観測しました。その益城町で、小学校での避難所運営に携わった奥村さんと、地区全体でのテント避難を成功させた三村さんに話を伺いました。

子どもたちと一緒に避難所を運営

4月15日から約2カ月間、益城町の小学校避難所を担当しました。災害対応経験もなく、食料の手配などすべてが手探り状態。800人の避難者に対して、配置された職員が6名程度だったため、全く人手が足りませんでした。しかし、地元の子どもたちが、おにぎりを握ったり、食料の配布を手伝ってくれたおかげで、それを見た大人たちも協力態勢に。被災者ボランティアの方や、学校の先生、各種支援団体の方と連携して、良い雰囲気での避難所運営ができたと思います。



益城町役場職員

奥村 敬介さん



みんなで力を合わせて実施した七夕祭り

という思いで取り組みました。

心と体がゆっくり休まる時間をつくる



昼間は椅子としても重宝した段ボールベッド

仮設トイレを男女別にわけたり、洗濯機・乾燥機を設置するなど日々環境は整っていきましたが、避難生活が長期化すると疲れやストレスも溜まります。支援制度を利用して、1泊バス旅行に行ってもらい、その間に、避難所内の大掃除と毛布の入れ替えをしたり。避難所を出たあとも、大変な生活は続くと思っていたので少しでも元気に、笑顔で避難所から送り出したい

被災生活を救ったのは“支え合う気持ち”

希望者みんなでテント避難をスタート

地震で家が全壊。もともとアウトドアが好きでキャンプ用品を持ち合わせていたので、安全な場所ですべてテント避難を始めました。その後、僕たちの様子を見た近所の方から「テント避難をしたい」という声があり、SNSで物資の支援を依頼。屈次次第、希望する方の敷地にテントをはっていきました。最終的に70張りのテントを設営。公民館に集まってみんなで食事をするのもあったんですが、そのときに行政の重要な書類を掲示して、情報を共有していました。



倒壊の危険性がない場所にテントを設置し、生活

普段から近所づきあいが盛んだったので、遠方へ買い物に行く人がついでに買い出しをしてくれたり、炊き出しの残りや翌朝の料理を作ってくれる人がいたり…と、みんなで不安な被災生活を乗り切りました。自衛隊やボランティアの方に必要な支援はお願いしましたが、自分たちでできることはやる、この意識も必要だと思えます。

近所のつき合いがあれば被災生活も耐えられる



温かいものを食べるとみんな笑顔に



益城町 東無田地区

三村 一誠さん

九州北部豪雨 避難生活レポート

平成29年7月5日から6日にかけて、福岡県・大分県を中心とする九州北部で発生した九州北部豪雨。大きな被害を受けた福岡県朝倉市で、自宅を離れている最中に被災した2名の方に話を伺いました。



長時間猛烈な雨が降り続いた朝倉の被害状況

早急な支援と 遠い再建への道

自宅は杷木一丁のすぐそばにあり床上浸水。災害発生時は勤務中で家には戻れず、片づけを始めたのは13日からでした。ボランティアの方の協力で最低限の生活ができるまでにはなりませんが、半年以上経った今もどこから手をつけようかという状態です。中学校に避難していましたが、お風呂は早い段階から自衛隊が用意してくれ、旅館が温泉を無料開放してくれたのも嬉しかったです。トイレ問題が一番大変で、役所からもらったビニールの簡易トイレを使用しました。年配の方は使い方



朝倉市杷木寒水地区

岩下 清美さん

がわからないこともあってか、あまり使わず我慢していたように思います。

共同生活だからこそ 生まれた思い

避難所はクーラーが効いているため、一日中過酷している人は「寒い」と言い、仕事などから戻った人は「心地いい」。それぞれが色々な思いを抱えていたと思います。支援ばかりに頼るのは……と思いつつ、農家の方からいただいた野菜などで朝食だけはいちみんなで作っただけです。そこで団結力ができたと思いません。大変な部分はありませんが、連携プレイや思いやる気持ちが生まれ、良い部分もいっぱいありました。

水害が残した爪痕は想像以上に大きい

災害はいつ、どこで起こるか分からない

私が外出中に災害が発生。義父だけが自宅にいて、家の一階で水に流されそうになりました。1時間かかえんとか二階へ避難しましたが、ケガで1カ月ほど入院せざるをえなくて。「もし水害が発生したら」と家族で話し持ち出し袋を用意していましたが、実際に起きたのはほぼ全員が家にいないとき。災害はどんな状況で起こるか分からないと痛感しています。息子が熊本地震を体験していて、女性用品や拭く物(デオドラント系)などをすぐ揃えた方が良いと教えてくれ、心強かったです。



朝倉市山田

渡邊 孝子さん

家族から離れると不安がる状態です。避難所に連れていけなかった猫などに会いに、自宅に定期的に帰っていた被災者の方もいます。

人もペットも 心のケアが必要



大量の泥や流木で埋めつくされた一階

避難所は家族ごとの仕切りというより、知り合い同士で部屋や区画で分けられていたので安心できました。また、失ったものは大きいですが品物は買うことが出来ます。人の優しさなどお金で買えないものを沢山得ることができました。あと自宅の庭で犬を飼っていたのですが、水に流されたのが怖かったです。家族から離れると不安がる状態です。避難所に連れていけなかった猫などに会いに、自宅に定期的に帰っていた被災者の方もいます。